

本年度（第4回）大会予告

研究通信

No. 20

1956年10月刊

村落社会研究会
編集部

仙台市片平丁：
東北大学教育
学部研究室内

第4回大会のお知らせ

既報のように、来る十月廿五日、我々の本年度大会が、東京において開かれます。今年の共同課題は、去年の大阪大会と同一テーマを継続、さらに深く追求しようとするものであります。新しい研究報告者三氏の発表を午前中に行い、午後は去年の報告者の一人小池基之氏司会のもとに活発な討議を展開できるように充分な時間をこれにあてました。

プログラムは次の如くであります。

日 時 昭和卅一年十月廿五日（木曜日）

午前九時より

場 所 毎日新聞社東京本社講堂

後 援

共同課題

午前の部

報告一

報告二

報告三

午後の部

（国鉄有楽町下車、すぐそば）
毎日新聞社人口問題調査会

「農家人口の変動と家族の構造」
研究報告

積雪地方における農家人口の変動と家族の構造（新潟大学長岡分校） 中野芳彦

瀬戸内海島村における人口移動
— 香川県仲多度郡高見島の実態 —

（東京教育大学農学部） 竜野四郎

村と人口現象
— 福井県石徹白村の場合 —

（日本農業研究所） 西村甲一

共同討議

司会者 小池 基之

協議会・懇談会（夕食）

午後八時頃解散予定。

何卒、万障くりあわせの上御参加のほどを期待します。

なお、同封の「ガヤ」にて折返し参加の有無を御知らせ下さい。

これを名簿訂正の資料にもあてたいと存じますので、

参加の有無にかかわらず是非御回報下さるよう重ねて御願

本年度大会に望む

(愛知) 川 越 洋 二

間もなく今年の大会が開かれることになりました。日頃同学の士と語りあう機会に恵まれない私たち地方在住のメンバーにとつては、年一回の大会は、旧知の諸学兄の業績に直接ふれると同時に、親しく御教示を受けることのできる爽りおおい場所であり、今から胸が高鳴るのをおぼえます。昨年はやむなく欠席した私は、今年是非討論に参加させて頂いて、今までのいろいろの疑点について、御指導を得たいと思つておりました。丁度その時、大会について希望をのべるようにとの連絡をうけました。すでに過去三回の大会に共通する批判、反省として、討論時間の不足、質疑応答の不活潑などがあげられておりますので、今年はこの轍をふみたくないものです。けれどもこれについていままさら意見や希望をのべようとは思いません。前者は大会運営者の手胸に期待できますし、後者は私たち一人一人の責任であるからです。そこで、私は村研の今後の研究のあり方について私見をのべてみたいと思ひます。

研究通信などをみると、村研のメンバーがこの研究会に期待し、おし進めたいと考えていることは大体次の事柄ではないかと想像します。

(1) 共同課題をもつこと。

(2) 各専門分野の提携および概念の共有化。

(3) 調査項目および指標の標準化。

(8) 才一の期待はいままでであるていど果されていと思ひますが、いままでは次元のことなる課題を考える必要はないでしょうか。おおくの会員が指摘しているように、村研の仕事が単なる学問的成果におわらず、農民の生活に何物かとプラスするものであることが重要です。これは私も強調するところであります。いまままでの共同課題が、実際にプラスしたかどうかは別として、その線に沿つて設定されてきたことは誰方も否定しないでしよう。けれどもそうした課題をとり上げながら、いまままでの共同研究は各専門分野の研究成果の交流の域をでておりません。現状では各分野の専門家が協力して一つの対象を解明する段階に至つておりません。この種の共同研究の必要は当然であり、それを望む声も研究通信などにポツポツあらわれていますが、これはなかなか実現できにくいと思ひます。その原

因の一つは、それぞれの科学の使用する概念が個々バラバラであることだと思ひます。

各科学の心からの提携は概念の共有あるいは相互理解によつて各科学が村落研究における自己の役割を認識するときに可能になると思ひます。そのための努力がもう考慮されてよい時期ではないでしょうか。そしてこれが結局こんごの研究のためのフレーム、オブ、レファレンスを提供することになるでしょう。調査項目や指標の標準化の問題もかなり前から提言されてきています。もちろん具体的な調査対象はそれぞれ特殊な存在ですから、あるところ有効なものがあるが、他の場所では不向ということもあり、すべての標準化は困難であり、不用でもありません。基礎的なものだけでも、あるていどの標準化がなされないかぎり比較研究は困難であり、全体としての村落研究を進めることができないでしょう。私はこれが切急にできると思ひませんが努力しなければならぬ問題だと思ひます。多くのメンバーが一定のフレームによつて、それぞれが自己の役割を認識しつづ、全国をいくつかのプロックにわけて共同調査を行う。その結果を比較検討しつづ、つぎのフレームと方法を樹立してゆく。

それこそ実証的理論的研究であり、村研の仕事もそこまで発展すべきではありません。研究にはつねに問題意識が重要であることは充分承知しているつもりですが、現在の共同課題に充分について行けない多数のメンバーのあることを知っている筈に、こうした課題のとりあげ方や、分科会あるいは研究体制をつくることの可否について、大会の席上では是非とも議題として頂きたいと思えます。

(東京) 大内 力

他の学会のことは知らないが、経済学関係の学会は、大てい低調でつまらない場合が多い。それには色々理由があるが、その最大の理由のひとつは、学会に出てくる人が、あまり自分の専門にこだわりすぎるためではないかと思う。そこで報告の方も非常に狭い専門の中でおこなわれるし、討論も専門の枠の中でおこなわれる。だから少し専門のはずれた者には興味がうすいし、またそういう人はそういう人で、

それは自分の専門外のことだというわけで、報告も討論も黙殺してしまつたために、いつそ学会が低調になるのである。村研の大会はもう少し専門からぬけてたものでありたい。素人論議でもいいから大胆に議論を展開したい。

それがじつは専門の発展のためにものぞましいことであらう。

(大阪) 山 本 登

村研のメンバーとして、あまり仕事らしい仕事をしないうちに、又大会の時期がきました。村落研究から遠ざかつたわけではありませんが、昨年から本年にかけては、未解放部落の研究や、近郊農村の問題とかいつた、あまり農村らしくない方向での研究に従事しました。人口の現象にしても農村の中で全く特異の傾向をもつブラタの問題は、やはりたとえマイ

ノリテイであるとしても研究の価値は充分にあると思えます。また近効の場合は逆の現象がでてくるわけですが、純農村の少ない関西のような場合、このあたりの視野も単に兼業とか脱農という概念では捉えられないものがあると考えられます。

本年度はこういう視野から討論にも参加し、会員諸氏の御意見を拜聴したいと思えます。討論に充分な時間をとられんことを希望します。

(仙台) 竹内 利美

大会は会員が顔を合せて談じ合う唯一の機会であるから、まずなるべく多数の参加者のあることが肝心。その点で昨年は少々さびしかった。今年は場所が東京、期日は社会学会の前々日という好条件なので、まず量の上で盛会が期待できるようだ。そこで次は内容の充実という注文がでる。それは何より「共同討議」の出来ばえ如何にかかつていよう。発表者を三人にしぼり午後を全部それにあてたので、時間はたつぷりあると思う。結局、本節の問題に即した論議の展開、なるべく多数の活潑な発言が切に望まれるわけだ。

渡 欧 通 信

(東京)有賀 喜左エ門

今年の八月二十二日から二十九日まで、オランダのアムステルダムで開催された、国際社会学連合の才三回世界大会に日本代表として参加するため、有賀喜左衛門氏は八月十二日深夜空路羽田を出発された。本年の大会の共同課題は「二十世紀における社会変化の諸問題」で、八つの部会から

構成される。その才四部会は「家族に見られる変化」であるか、これは一般・西洋・東洋の三分会に分れ、有賀氏はプリンストン大学のマリオン、レイイ氏と共に東洋の分会の座長をつとめられることになつていた。村落社会研究会の会員としては武田良三氏も参加されたが、有賀氏の書面によつてその近況をお伝えすることにした。

〔アムステルダムより〕

(上略)つんぼとおしの旅行は、小生をしてアムステルダムへ来させた。途中イスタンブール、ジュネーブにより、ベルンも見たし、ユングフタラの峻峰に電車で登山して、時天のアルプスをたのしんだ。僕は片言で英語の

通ずる不思議な奇蹟に驚き、英語が次才にしゃべれそうになつて来たのに更に驚いてゐるが、それは旅行に限つてのことだ。

ISAのコンGRESでは全くまいつた。しかし新しく参加したロシアはロシア語を要求して平気で喋るので、西欧諸国は僕に日本語を喋るようになすめた。僕は国語を喋べつて国民性を主張する程の愚論は学会では必要ないと思ひ、もつとも便宜主義だが、日本語で発表し中根チエ氏が通訳した。態度はなかなかよかつたと同行の武田・岩崎両君がほめてくれた。しかし自分では決してそうは思はれぬ。やはり上つていたようだ。

(これは廿五日)

廿七日には僕がチエアマンになる筈だつたが、やめたマリオン・リツイがした。彼は小生に対して実に丁寧親切で尊敬を持つてくれるのになつた。やはり論文をいくつも書いて送つておいた事は役に立つた。これでお役目がほぼ終つたから、これから旅をグニセンするつもりだ。

アムステルダムのレムブランドは目下四枚しかないが、非常に深い画でたまげた。ゴッホ(正しくはボツホ)は数十枚見て彼がいかに日本の画から影響を受けたかを如実に知つ

た。僕はやはり芸術に最も心を引かれる。オランダではエキスカーションにRothem(干拓)を見た。これも日本人にとつては実に教えられる。ソイテル海は今や次才に干拓されつつある。才四期計画で完全に陸地になる。オランダには天の候中主がいて凶造に夢中だ。僕はオランダの神代を現実に見た。オランダはやはりおそろるべき力をもつ。

イスタンブールも東西の混淆で面白かつた。僕も西洋を学びはじめ、西洋にやはり驚き感心し、又味気ないものも感ずる。合理主義があまりにも目立つてうげ入れがたいものもある。

〔ロンドンより〕

ロンドンに来て沢山の画を見た。ケンブリッジ大学・オックスフォード大学を見て、イギリスの文化の何ゆかをのぞき得た思ひだ。僕は一応驚き、それから日本人に帰る。合理主義の鼻につくところもあるが、とにかく西洋人というものは面白い。美術館は僕を無限に自由にし、夢の舞臺をひろげてくれる。僕は今迄より美術が深くわかり、もつと楽しむことを知つた。こんなにも人間は良いものを創造してゐることを知つた。

(二七)

西洋の農村も都市もそういう創造物の一つであることを知つた。美術が社会学と関係ないとは云へない。そして僕はこのうしろのすることを知らず共に、僕自身はますます日本人になり、日本人として大きくならなければならぬことを思う。

明日(十日)マドリッドに行く。

年報才三輯発行近し

我々の研究会は、既に才一輯、村落研究の成果と課題、才二輯、農地改革と農民運動(才一回及び才二回大会共同課題によるもの)の二冊の年報を刊行して来ましたが、今秋、大会会場において発売するよう印刷中の才三輯は、次のような豊富かつ最高の内容をもつ「村落共同体の構造分析」の特輯号であります。「村落共同体」の問題をめぐつて経済学、社会学の両分野よりする諸家の論議が縦横に展開され、これにつづいて村落共同体に関する海外の研究を米・仏・露・独にわたつて紹介。

また、毎輯継続している各学界研究動向は村落社会学における我々の共同のための

足場を提供しています。

会員各位、ならびにその紹介者には例年のように若干の割引を予定されておりあります。(中野)

村落研究会大会(十月廿五日)

会場にて発売

「村落共同体の構造分析」

A6版 二七八頁 四二〇頁

一 現代日本に於ける村落共同体の存在形態

福 武 直

二 村落共同体と家

有 賀 喜左門

三 村落共同体—東北地方近世村落の

実態から 中 村 吉 治

四 半封建的共同体の形成契機と耕地強制

星 莖 惇

五 漁業と村落

竹 内 利 美

六 村落共同体に関する覚え書

喜多野 清 一

七 村落共同体に関する海外の研究

1 アメリカ農村社会におけるルーラル・

コミュニティ論の展開 森 岡 清 美

2 フランスに於ける村落共同体研究の動向 野 口 隆

(一一二八)

3 ロシアに於ける村落共同体研究の動向 小 森 哲 郎

4 デルマン的共同体の家族構造 住 谷 一 彦

—サン・オネルマン・デ・マレ修道院所領明細帳—

八 研究動向

1 社会学 川 越 淳 二

2 経済学 木 下 彰

3 法律学 潮 見 俊 隆

4 歴史学 永 原 隆 二

5 地理学 佐 藤 基 次 郎

編輯後記

「年報才三輯」は大会当日、会場でおわけできるようにあります。不参加の方々もどうか一本を備えるようにして頂きたく存じます。できましたら最寄りの方々にも御すすめ下さつて、研究単位でまとめて御買求め願うよう望みます。一般の書店を通して買えますが、まとめて直接「時潮社」あて御申込下されば、割引の特典があります。「年報才二輯」のはけ方は少々思わしくなかつたので、本年はとくに会員各位の積極的御力添えを願います。

告知版

はやばやしているうちに、もう一年経ち、本事務局最終便を響かねばならぬことになりました。あまりベツトしない活動ぶり、全く申訳のない次才です。

本号は前号発行から少々間隔になつたので、内容だけはせめてもつと充実したものを思つたのですが、編集の不幸際からか、原稿の寄りが思うように参らず、残念でした。三、四名の原稿予約がありながら、現物がとどかず、ぎりぎりまで待つたのですが、間に合いかねました。この会では「研究通信」が唯一の連絡方法ですので、どうかもう少し活潑な御寄稿をおねがひしたい。交換台の役割が事務局の主な仕事ですので、どうも開放な通話ぶりの一年というよりはかない状態。次回の事務局の方への申おくりも、才一はこの点をどうするかということ

大会も間近い。共同課題を中心に実のりの多い成果を何より期待していますが、協賛の際に、会自体の運営を活発にすることに



ても、いざとなると改善策をおたがいに検討し合いたいものと思ひます。



昨年大会以後の会員の異動、会費納入の状況は別記のようです。会費の納入をもつと勵行して頂くこと、会員の勧誘の方法をどうするか。こんな点も一つの問題でしょう。同封のハガキは、大会参加の有無の問合せですが、名簿訂正の資料にも活用したいので、ごひ御回答下さい。郵便の転送が多いようですので、この際正確なところをせびとらえたいです。同平、御返刀下さい。

村研概況

(一) 会員数 二〇一名(十月現在)

(地方別内訳)

- 北海道 三四名、 東北 二二名
- 関東 六三名、 中部 二四名
- 近畿 二三名、 四国、中国 一〇名
- 九州 二四名、 外地 二名
- (二) 会費納入
- 昨年度分納入者 五五名(納入率七三%)

(本年度分納入者 三名)

(事務局扱)

(本部扱)

計 一八名

(三) 大会後の新入会員

岡山 雅直(長野県駒ヶ根市宮田田)

(中)

田野崎昭夫(仙台市片平丁、東北大学文学部)

棟崎 京一(東京都世田谷区代田、東京教育大)

飯塚 博久(野馬県館林市足次)

(四) 村研年報

才一集

才二集

村落研究の成果と課題(一九五四年) A 5版、二六〇頁、三〇〇円

農村改革と農民運動(一九五五年) A 5版、二四四頁、三〇〇円

才三集(近刊)

村落共同体の構造分析(一九五六年) A 5版、二七八頁、四二〇円

発行所 東京都文京区向ヶ岡雑生町三

時 潮 社

(振替東京三九二〇)

(一一二九)